

【フロンティアスクール用中間報告書様式】

(都道府県 山 形 県)

I. 学校の概要 (平成14年4月現在)

白鷹町立東中学校						
	1 年	2 年	3 年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	3	3	1	10	23
生徒数	91	113	116	1	321	

II. 実践研究の概要

1. 主題 (テーマ)

『個を生かす授業の創造』

2. 内容と方法

(1)実施学年・教科 (選択した理由を付すこと)

3年生数学科 (子どもの理解度の差が広がっている状況に対応するため)
 2年生数学科 (子どもの理解度の差が広がっている状況に対応するため)
 3年生英語科 (子どもの理解度の差が広がっている状況に対応するため)
 全学年全教科 (個に応じた指導の工夫や学力の評価を生かした指導の改善を進めるため)

(2)年次計画

平成
14
年
度

○テーマ

『個を生かす授業の創造』

～生徒同士の関わりを大切にしながら、基礎・基本を定着させる指導の工夫～

○仮説

- ア 生徒一人一人の実態に即し、発展的学習 補充的学習などの個に応じた指導のための教材・指導法を工夫すれば、意欲的に学習が展開され、とともに、基礎・基本を定着させることができるのではないか
- イ 生徒同士が関わり合い、自分の考えを確かめたり、修正したり、広げたりする場面を設定していけば、個が生かされ、意欲的に学習が展開されるのではないか
- ウ 目標に対する評価活動を取り入れ、その結果から個に応じた学習を展開していけば、基礎・基本を定着させることができるのではないか

○研究内容・方法

- ・ 標準学力検査の実施と分析
 - ・ 各教科における観点別評価規準表の作成
 - ・ 「学力向上フロンティアスクール実践研究」3カ年にわたる研究計画の作成と研究体制の確立
 - ・ 主題追求のための授業研究の実践
 - ・ 主題追求のための日常の授業実践
- ア 1時間毎または数時間の小単元毎に、目標の到達度を把握できるような評価活動を工夫して行い、発展学習・補充学習等 個別学習への展開を図る。
- イ 自力で課題解決させる場と、生徒同士に関わらせる場を設定し、それぞれの場で学習プリント・手引き・助言等 個が生きるような支援を工夫する。
- ウ 数学科と英語科においては 次のような指導方法・指導体制の工夫を行う。

<数学科>

第2学年3クラスについて、毎時間IT方式の授業を行い、第3

学年3クラスについて、毎時間コース制学習（習熟度別学習）の授業を行う。

<英語科>

第3学年3クラスについて、毎時間T T方式の授業を行う。

平成
15
年
度

○テーマ（案）

『個を生かす授業の創造』

～評価活動を生かし基礎・基本を定着させる指導の工夫～

○仮説

ア 目標に対する評価活動を取り入れ、その結果から発展的学習・補充的学習などの個に応じた指導を展開していけば、基礎・基本を定着させることができるのではないか

イ 個に応じた指導のための教材・指導法を工夫すれば、意欲的に学習が展開されるとともに基礎・基本を定着させることができるのではないか。

○研究内容・方法

- ・ 標準学力検査の実施と分析
- ・ 主題追求のための授業研究の実践
- ・ 主題追求のための日常の授業実践

ア 1時間または数時間の小単元毎に、学習内容に対する評価活動を行い、一斉指導の形態で補充を行った後、個に応じた指導の工夫を行う。

イ 単元末に単元テストを行い、その結果を受けて発展学習・補充学習等、個別学習への展開を図る。

ウ 数学科と英語科においては、次のような指導方法・指導体制の工夫を行う。

<数学科>

第2学年3クラスについて、毎時間T T方式の授業を行い、第3学年3クラスについて、毎時間コース制学習（習熟度別学習）の授業を行う。

<英語科>

第3学年3クラスについて、毎時間T T方式の授業を行う。

- ・ 全学年の選択教科Iの中での個別指導実践

平成
16
年
度

○テーマ

現在のところ、平成15年度と同様の内容で、より

○仮説

深化・発展させていきたいと考えている。

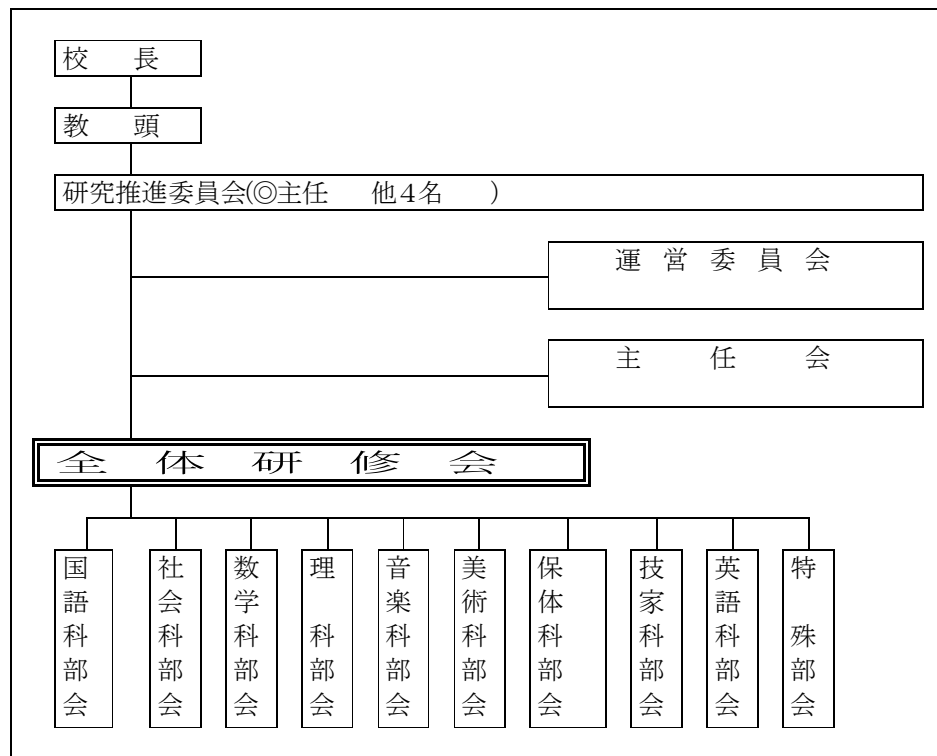
○研究内容・方法

<平成16年度のみ計画>

- ・ 平成15年度とほぼ同内容の単元テストの実施と結果分析
- ・ 公開授業研究会の実施（11月末）
- ・ 3年間の実践をまとめた研究記録集の発行

(3)研究体制

フロンティア事業に関する実践研究組織図（平成14年度の組織図）



III. 平成14年度の成果及び課題

○成果

- ・各教科における個に応じた指導のための教材・指導法の工夫については、各教科担任が内容を任せているが、定期的な実践報告の提出を行うことで、共通実践を進めてくれた。単元の半ばに複線的な指導を行ったり、学習プリント・学習カードを用いた個別学習を行う実践例が多く見られた。
- ・単元途中や単元末に学習の評価を行い、その結果から補充学習を進める実践を通して、学習の定着度を高めることができた。さらに単元末に学習の定着度に応じて、発展的学習と補充的学習のコース制学習を選ぶような工夫も行い、個に応じた指導を展開できた。
- ・3年英語科と2年数学科において1 C 2 T型のT T授業を実施し、ドリル学習で机間指導する生徒集団を半分ずつ分担するなどし、できるだけ個に応じながら生徒の学習意欲を高めることができた。
- ・3年数学科においてコース制(習熟度別学習)を実施し、基礎的コース・発展的コースそれぞれの生徒が自分のペースにあった学習が進められた。またそのことによって「わかる楽しさ」をより感じさせることができ、意欲的な学習につなげることができた。さらに、定期テストの得点が確実に向上した生徒が増えた。下記の表は、A(ゆっくり)コース参加者の定期テスト平均点を2年時と3年時とで比較した結果である。(※全体の平均点は2年時と3年時でほぼ同じである。)特に2年時のテスト平均点が低い生徒ほど大きな得点の伸びがみられ、Aコースでの学習の成果が表れたものと考えられる。

2→3 2年生時の平均点 年の平均点の増減	35点未満	35～55点	55～75点	75点以上
20点以上アップ	1人	1人	0人	0人
10～20点アップ	5人	2人	1人	0人
0～10点アップ	3人	9人	5人	0人
0～10点ダウン	3人	6人	3人	2人
増減の平均	+8.1点	+3.8点	+1.7点	-1.2点

○課題

- ・年間指導計画内に観点別学習評価規準記載したが、それをもとにして日常的に評価活動を行い指導の改善に結びつけることが、まだまだ不十分で計画的でない状況である。来年度は単元テストと連動させた取り組みを行っていききたい。
- ・3年数学のAコース参加者のうち、成績が伸びなかったり後退した生徒は、2年生時の平均点が80点程度の生徒と授業を欠席することが多い生徒であった。2年生時の平均点が高い生徒については、B(普通進捗)コースでの学習を行うことが適切であると考えられる。ガイダンスによりその点を詳しく説明し、よりよいコース選択を行わせていきたい。
- ・研究の成果を客観的データで示すための工夫をあまり考慮してこなかった。来年度は単元テスト後の補充学習により定着度がどれだけ上昇したかを分析するなどの工夫を行っていききたい。

IV. 学力把握のための学校の取組について

- ・標準学力検査を年1回、3月に実施する。
- ・各教科で単元テストを実施し、生徒一人一人の到達度を測定する。

V. フロンティアスクールとしての成果の普及について

○研究会、説明会等の開催実績及び開催予定

- ・平成16年度11月末に公開授業研究会を実施の予定

○HP作成等の工夫の実績及び今後の予定

- ・平成15年度に (<http://www1.shirataka.or.jp/east-jhs/frontier/>) にて実績の公開を予定

